

に一日一日と帰国の日を待ちわびることになる。

冬も去り、春来り、やがて七月半ばようやく帰国の情報が入り待ちに待った祖国日本への帰国、どんなに待ち侘びたことか。

出発！といっても凶のう一つ、いや体一つでもいいとみんな喜びに湧いた。

輸送列車に乗り込んで一路南下、途中機関士に金をつかませないと出さないとかで列車がとまることもあったがようやく錦県に到着した。

ところがパラチフス発生で一週間足どめ！。

ようやくコロ島からアメリカの貨物船に乗り込み、途中玄海灘で大荒れ、胃痛に悩まされモルヒネを注射してもらい辛うじて乗り切ることができた。

二日目懐かしの祖国日本を望むことができた。

博多に上陸、銀シャリのお握りを配られ、はくばることができた。

仮設の宿泊所で一泊帰郷の手続など済ませ翌日それぞれ懐かしの故郷への途についた。

二十一年も八月の末であった。

死の逃避行

北海道 福田むめ

昭和十二年埼玉県庁を退職、満州奉天省へ土木技術者として渡満した主人は五十年に死亡。

渡満した当初は生活も楽で給料は約二倍の百円ぐらいでした。戦争が激しくなり日本人の生活も変わって来ました。奉天より蓋平県へと転勤主人も召集され、そして終戦となりました終戦と同時に日本人の身に危険が迫り、荷物を馬車十台ぐらいに並べて田舎の学校へと非難しました。

その晩からダイナマイトや鉄砲や鉄棒などで暴民がおそって来ました。だんだんと人数も多くなってくるので、若い人達が毎日のように犠牲者が多くなって来ました。そして男性達はどこかにつれて行かれ女子供達ばかり残ってしまい、男の方は少なくなり食料も手に入りにくくなり、そして言葉たくみに身の補償をしてやると

いって警察官に全部持金を取られてしまいました。その晩から毎晩のように鉄砲持って（チェーンケエ）お金をくれと言つて鉄棒でたたきにくるので、おそろしくなつて真夜中ににげ出しました。

それから老若男女子供と合せて五、六十人ぐらゐの団体で力を合せて行動が始まりました。無事に安全な場所まではと心に祈つて出発、考えればもう敵国にいるのです。

頼れるのは自分一人と思ひ、子供に出来るだけ荷物をもちせ私が二歳と四歳の子供をつれて荷物はオムツと少々の食料でした。始めは皆さんと行動が出来ましたが、山こえ川を渡つて行く内に力がなくなり、皆さんと行動が出来なくなりました。元氣な人達は木や草につかまつて渡ることが出来ましたが、後の私達は草や木もなくなつてつかまる木がなく平な道まで登ることが出来ず、ここが最後かと思ひました。二人の子供は上で泣きながら大きな声で呼ぶので、同胞が迎えに来てくれてやつと平な道を歩きだし、お礼を言う言葉も出さずに同胞達の休んでいる場所までたどり着くともう出発です。無

事で歩いて行きましたが皆さんと一緒に行動出来ず山の中で迷子になってしまいました。

途中日本人の歩いた道は白い紙がありました。用便用、それを目当に歩く満人の民家がありました。トゥキビ鼻がありました。取つて来て露を口にふくませて飲み込む力がなく、あせりが出て親子五人で歩き出したら、木の葉が高くなつています。へんだなあと思つて足でけつたら女の子の赤ちゃん、日本人です。まだ息がありました。手を合せて来てしまい可愛そうでなりませんでした。

歩いている内に民家があり、その先にお店もありました。店の前で親子五人は歩けなくなりまして、だれかがつれてつた場所は刑務所でした。日本人が大勢来ていました。二男裕が急死自分で焼いて骨を持ち帰りました。

博多へと上陸し主人の実家へ帰りました。後は衣、食住、なし。毎日食料さがし。口や筆では書きつくせません。死の生活苦の始まりです。主人も他界。私は子供に世話になつていきます。年のせいか目も薄くなり記憶力もなくなりました。